首都アンカラ

人口が一千万人を超えるトルコ最大の都市イスタンブールをトルコの首都と思っている人が意外に多い。

トルコの首都はアンカラである。トルコ観光でイスタンブールを訪れないコースはほとんどないが、八日前後の日程ではアンカラに行かないことが多い。

トルコ共和国は一九二三年に誕生した。オスマン・トルコの時代を含めて長く首都だったイスタンブールから、共和国誕生とともに首都はアンカラに移された。

世界最強の国として長く栄えたオスマン・トルコ帝国は第一次世界大戦で敗れた。勝利を収めた連合国の一つ、ギリシャは、これを機にかつてコンスタンティノープルと呼ばれたイスタンブールを我がものにするため侵入してきた。

このトルコ崩壊の危機を救ったのが、のちに初代大統領となるムスタファ・ケマル将軍である。彼はトルコ国民軍を率いて四年間戦い、現在のトルコ領を守り抜いた。

このため国民の彼への信頼は厚く、アタチュルク（トルコの父）と呼ばれるようになる。

トルコ共和国の初代大統領になった彼は数々の大胆な改革を実施した。その一つが当時、人口三万人の街、アンカラに首都を移したことである。

これはオスマン・トルコ時代の旧弊を断ち切るためで、川も海もない内陸の小さな街は、ヨーロッパ的なにおいがする人口三百六十万人の大都市へと変化した。

遷都のほかイスラム教との政教分離、一夫多妻制の禁止、女性の参政権実現、男女平等の義務教育実施、男性のフェス（鉢型のトルコ帽）、女性のペチェ（顔を覆うヴェール）の禁止などの改革で、西欧型近代化を一挙に推し進めた。

執務中、五十七歳の若さで亡くなったが、彼への尊敬の念は今も絶大で、各地で銅像や写真を見かけた。

ガイドのトルコ人男性の言葉の端々にアタチュルクへの尊敬が感じられ「アタチュルクが守った国土の爪の広さの領土でも侵されるなら、それを守るために戦う」と言った言葉が印象的だった。

とにかく、あちこちに平日でも国旗が掲げられ、愛国心に満ちあふれた印象を受け、今の日本と余りに異なる。

もう一つ強く感じたことは、子どもたちの目の輝きである。

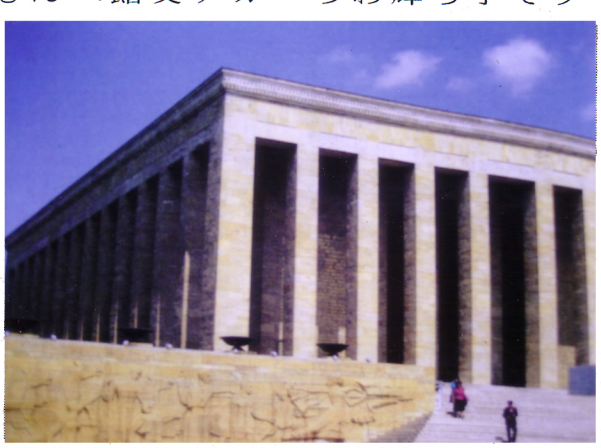
以前、フィリピンのスラムの人たちとの交流の際も同じことを感じたが、日本の子どもたちに比べてトルコやフィリピンで出会った子どもたちは目が輝き、きわめて人なつこかった。

アンカラのアナトリア文明博物館に入る際、たくさんの子どもたちが社会見学で訪れているのに出会った。「こんにちは」と日本語であいさつする子どももおり、にこにこして近づいてくるので、一緒に記念撮影した。

もし、言葉が通じたらと残念でならなかったが、この目の輝きや明るさが日本の子どもたちにもほしいと思った。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

明るく人なつこい子どもたちに囲まれて



アンカラのアタチュルク廟―この中に棺も安置してある